

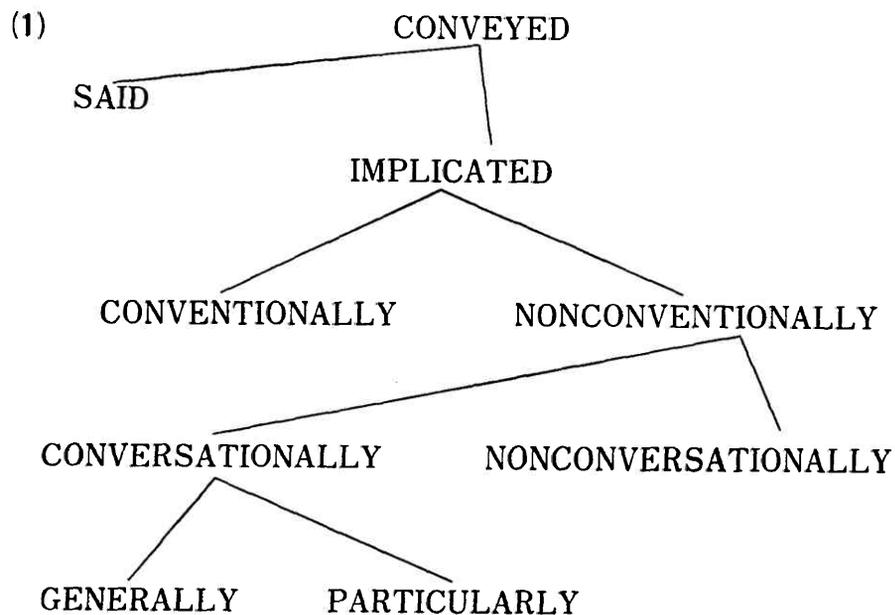
英語条件文の意味論的分析

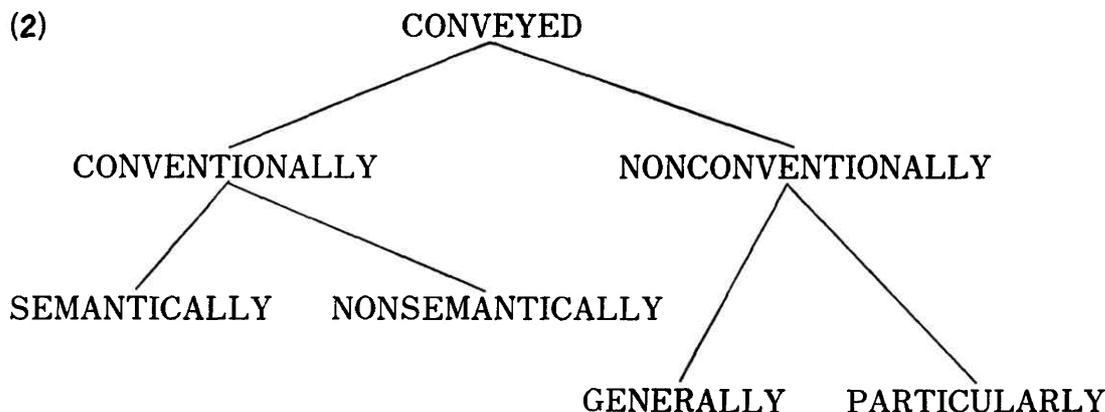
竹 鼻 圭 子

0. 序

条件文の諸機能について、意味論的、語用論的な立場から様々な観察がなされてきているが、それらの諸機能が文法のどのレベルにおいて記述されるべきなのかについては問題にあまりされていないようである。そこで本論ではまず意味論の枠組を検討し、それにもとづいて条件文の諸機能を整理してみたいと思う。

Sadock(1978)によれば、ある発話の情報伝達のあり方は、(Grice(1975)においては(1)のように分類されるとしていたが、SADの部分とCONVENTIONALLY IMPLICATEDの部分の類似性、およびCONVERSATIONALLYとNONCONVERSATIONALLYの部分の類似性のため、(2)のほうが好ましい分類であるとされている。





そしてこの枠組のなかで、CONVENTIONALLY の部分と NONCONVENTIONALLY の部分とは、前者はせまい意味での意味論が、後者は語用論があつかうべきところであり、この区分は文法の記述上非常に重要であると考えられる。

そこでこの二つを区分する特徴について(3)にある Grice (1975) の論を Sadock (1978) では詳しく吟味している。

- (3)(a) Conversational implicata are capable of being "Worked out" on the basis, inter alia, of the Cooperative Principle. That is, they are CALCULABLE.
- (b) Conversational implicata are CANCELLABLE.
- (c) Conversational implicata are NONDETACHABLE.
- (d) Conversational implicata are not part of the meaning of the uttered forms. They are NONCONVENTIONAL.
- (e) Conversational implicata are not carried by what is said, but by the saying of it.
- (f) Conversational implicata may be INDETERMINATE.

ここでは詳しい議論は省略するが、結果的には(3)の諸特徴の中で、(a), (b), (c)のみが有効であると Sadock は結論づけている。

この三つの特徴についてどういう意味なのか説明しておく必要がある。まず CALCULABLE というのは次のような Cooperative Principle から推論されうるということである。

- (4)1. The maxim of Quantity has two parts that require the cooperative speaker

to say as much but no more than is required for his particular purposes in the “talk exchange”;

2. The maxim of Quality also has two parts, and demands that the speaker say only what he believes to be true and on that for which he has sufficient evidence ;
3. The maxim of Relation urges the speaker to make his contribution relevant ; and
4. The maxim of manner cautions the speaker to be methodical and to avoid ambiguity, prolixity, and obscurity.

次の CANCELLABLE というのは conversational implicature というものは序盾することなく否認できるという意味である。最後に, NONDETACHABLE というのは, XがMという意味を持った文で, C_K が文脈KにおけるXの conversational implicature である時, Xと同じ意味Mを持ってはいるが, C_K を持たないような文 X' が存在することは不可能だということを表わしている。

以下の議論では(2)に示した分類が(3)の(a), (b), (c)のテストにもとづいて行なえるものとして条件文の意味機能を分類してゆくことにする。

1. Conventionally Conveyed

ここでは Calculable, Cancellable, Nondetachable という性質を持たないと考えられる諸機能について観察してみる。

1.1 Semantically Conveyed.

このレベルで記述されるべき意味機能は, truth condition にかかわる意味に関与するものであり, 条件文の持つ基本的な意味が記述されるべきレベルということになる。

条件文は一般に次にあるように indicative conditionals(5) と subjunctive conditionals(6) とに分類される (山梨 (1975) より)。

(5)(a) If it rains tomorrow, the game will be cancelled.

(b) If you study hard, you will pass the exam.

(c) If Bill beats his wife, he will get divorced.

(6)(a) If Mary had been wise, she would have divorced Dick.

(b) If dodos were still alive, I would hunt them.

(c) If Mary were not idle, she would be a good secretary.

indicative の条件文についてはふつう条件節も主節も真偽値を持たない, すなわち nonfactive であると言われている。一方, subjunctive の条件文はふつう反事実の条件文

that bread and wine. (*Love Story*)

2. Nonconventionally Conveyed

ここでは, Calculable, Cancellable, Nondetachable という性質を持つと考えられる条件文の諸機能について観察する。

2.1 Generally Conveyed

このレベルでは, Nonconventional な意味機能の内でも, 非常に一般性の高いものについての記述がされるべきであろう。

まず次に挙げたような一連の文は, 一般に修辞条件文 (Rhetorical conditionals) と呼ばれるもので, 条件節の内容が偽であることを強意するために用いられるものである (山梨 (1975) による)。

(17)(a) If John is an eligible bachelor, I'll eat my hat.

(b) If Harry is a genius, I'm a monkey's uncle.

(c) If Nixon is not guilty, I'm a Dutchman.

こういった文がなぜ条件節の内容が偽であることを強調しうるのかが問題であるが, どの文の主節の内容もわれわれの一般的知識からすれば, 偽であることが重要である。すなわち, 序で述べたように, Cooperative Principle の一つに真であることを言うということがあったが, 次表にあるように, 論理的には q が偽であってかつ文全体が真であるためには, p もまた偽でなければならないということが言えるのであり, 聴者がこういった推論をすることで, 修辞条件文の意味機能が生まれて来るものと思われる。

(18)	\supset	p	q	
		T	T	T
		T	F	F
		F	T	T
		F	F	T

また, 次のような文は純粋に修辞条件文と呼べないかも知れないが, 同様の推論が働いて結果的には条件節の内容が偽であることを強めることになるものと思われる。

(19)(a) I'll be damned if I see how you got within a mile of her unless you bought the groceries to the back door. (*The Great Gatsby*)

(b) I'd be damned if I'd go in. (*ibid.*)

第二点として, Geis & Zwicky (1971) が指摘しているように, 条件文には次のような性質がある。

(20) Conditional Perfection

A sentence of the form $X \supset Y$ invites an inference of the form $\neg X \supset \neg Y$

すなわち、次例において条件節の内容の事態がおこらなければ、主節の内容の事態もおこらないのだということを言っているのであり、たとえば (21a) では「John がそれ以上窓から身をのり出さなければ落ちはしない」ということが推論されるというのである。

- (21)(a) If John leans out of that window any further, he'll fall.
 (b) If you mow the lawn, I'll give you five dollars.
 (c) If you disturb me tonight, I won't let you go to the movies tonight.
 (d) If you heat iron in a fire, it turns red.
 (e) If you see a white panther, shout "Wasserstoff" three times.
 (f) Biff, dear, if you don't have any feeling for him, then you can't have any feeling for me. (*Death of a Salesman*)

論理的には $X \supset Y$ であれば $\neg Y \supset \neg X$ ということは言えるが、 $\neg X \supset \neg Y$ ということは必ずしも言えないのであり、日常言語においてはなぜ Conditional Perfection というようなことがおこってくるのか問題になってくる。論理的に「逆は必ずしも真ならず」と言う場合、たとえば、「男の人は人間である」ということの逆「男の人でなければ人間でない」は真でないというようなことをさすのであるが、日常言語における条件文では、このような集合の包含関係ばかりでなく、序で述べた maxim of relation に含まれると思われる、因果関係なり時間的前後関係なりが表現されるわけであり、このことから「X という事態がおこれば、Y という事態がおこる」という文からその逆の「X という事態がおこらなければ Y という事態もおこらない」という推論が働くのは当然のことと思われる。そしてこういった一般的推論が会話の場面で行なわれることにより、(21)において(a)は prediction, (b)は promise, (c)は threat, (d)は law-like statement, (e)は command といったような発語内行為を行ないうることにつながってくるのであるが、こういったことは次節で述べるレベルに属することになる。

2.2 Particularly Conveyed

このレベルでは、発話の行なわれた状況によって生じて来る意味機能が記述されるべきであろう。

前節で述べた Conditional Perfection というのは毛利 (1980) によれば「語用論的対偶」と呼ばれるものであるが、このことと価値判断とが結びつくことにより条件文を使ってのいくつかの発語内行為が成立する。この点については Wunderlich (1977) 毛利 (1980) に詳しいが、ここではその概要を述べておくことにする。Wunderlich (1977) によれば, indicative conditionals によって次のような発語内行為がなされる。

- (22)(a) warning : If you tease the dog, you will get bitten.
 (b) threat : If you tease the dog, you will get thrashed.
 (c) advice : If you don't cover the ace, you will win.

(d) extortion : If you don't sew my coat, then I won't repair your lamp.

(e) negotiation : If you sew my coat, then I will repair your lamp.

(f) offer : If you like a Scotch, I'll give you one.

このような意味機能を説明するには、上記の語用論的対偶や価値判断以外に、毛利(1980)の言う「十分読みと必要読みとの使いわけ」が必要であり、その内容は下記の通りである。

(23) 「Pでないならば [=Pでなければ], Q」という条件文について、

十分読み= $\neg P$ でない/ は /Q/ の十分条件

必要読み= $\neg P$ / は /Qでない/ の必要条件

を使いわけること。

「雨が降らなければ運動会がある」は十分読みをすべきであり、「雨が降らなければ水不足になる」は必要読みをすべきである。

これらの語用論的要因にもとづいて、聴者による実行的推論 (practical inference), すなわち行動についての決断を導き出す推論, が行なわれることになる。

このことを警告 (warning) を例にとって観察してみることにする (Wunderlich (1977) より)。

(24) 警告 (warning)

(a) 基本形式

“If you do a , then q ”

聴者Aにとって q は悪いことであり、この状況下においてAが a を行なう可能性がある。

(b) 実行的推論

(状況)

私(聴者)は a をしようとしている。

(警告の内容)

If I do that (a) then q .

(価値づけ)

しかし、 q は悪いことである。

(意図)

ゆえに： q を防がなければならない。

(警告の内容の語用論的対偶)

a をしないことによってのみ q を防ぐことができる。 [a は q の十分条件]

(実行的推論)

ゆえに、私は a をしないでことう。

警告の実例を挙げてみると、

英語条件文の意味論的分析

(25) Listen, if they steal any more from that building the watchman'll put the cops on them! (*Death of a Salesman*)

そして、(24)におけるQを話者自身が行なう場合、条件文は次例のように「脅迫」の意味を持つ。

(26) You big ignoramus, if you say that to me again, I'll rap you one! (*Death of a Salesman*)

また、Qが聴者にとって良いことである場合は、次例のように「忠告」の意味になる。

(27) I don't want to kick anybody out, if they do their work. (*The Last Tycoon*)

このような条件文による発語内行為をまとめたものが次表である（毛利（1980）より、□は悪いこと、○は良いことを示す）。

(28)

対話者 発語内行為	Ⓐ 話者 文を発話する	Ⓑ 聴者 推論から決断にいたる
① 警告 脅迫	PならばQである PはQの十分条件	→ [対偶] Qがいやなら非Pが必要 決断：Pをやめる
② 強い 忠告	PでなければQでない PはQの必要条件	→ [対偶] Qを欲するならPが必要 決断：Pをする
③ 弱い 忠告	PならばQである PはQの十分条件	→ [逆] 「QならばP」は必ずしも成立しない 決断：Pをする。またはほかの方法を探る
④ 安全 確認	Pで（さえ）なければQでない PはQの必要条件	→ もともとQがいやだから、 とくに決断をする必要がない。
⑤ 対策型 忠告1.	Qがいやなら非Pとせよ 〔①—③の推論部分の先取り〕	→ 命令文だから推論の余地なし 決断：いわれた通りにする。またはしない
⑥ 対策型 忠告2.	□ならば（そしてQがいやなら ○ば）	→ 命令文だから推論の余地なし 決断：いわれた通りにする。またはしない

以上は indicative conditionals の場合であるが、これが subjunctive conditionals になると少し事情が異なってくる。実際には起らなかったことが述べられるからである。以下に Wunderlich (1977) より例を挙げておく。

(29)(a) didactic instruction : If you hadn't tease the dog, then you would not have gotten bitten.

(b) reproaches : If you had sewed my coat, then I would have taken you to the movies.

(c) justification : If you had wanted a Scotch, then I would have given you one.

3. 結 び

本論では条件文の持つ意味的諸機能について、会話の含意という観点からの分類を試みたわけであり、各々の機能がどのレベルで記述されるべきであるかを論じてきた。まとめてみると次のようになる。

(30)

conventionally conveyed	
semantically	nonsemantically
truth condition にかかわる ◦ indicative conditionals $\supset p \rightarrow q$ 前提 $\phi \rightarrow \psi$ ◦ subjunctive conditionals $\supset p \rightarrow q$ 前提 $\neg \phi$	◦ $(I \text{ say } \langle \text{it is } [q] \rangle) \parallel \text{if } p$ $\uparrow \quad \quad \quad \downarrow$ ◦ 擬似仮定
nonconventionally conveyed	
generally	particularly
修辭的條件 $\supset p \rightarrow q$ において q が偽 $\therefore p$ も偽	發語内行為 (実行的推論, 語用論的対偶, 価値判断等)

このなかで nonconventionally conveyed の部分についてはその意味機能が語用論的諸要因から生まれるという性質からも明らかのように、Universal な機能と考えられる。すなわち、各言語で条件を示すような表現をとりあげれば、同じようなことが言えるのである(たとえば、日本語で「あの犬をからかったらかまれるよ」と言っても英語の時と同様、警告の意味を持つ)。

ここでは条件文の意味的諸機能についての分類を試みたわけであるが、他の統語事象についてもこのような試みをすることによってはじめて語用論が意味論の “wastebasket” であるという汚名をまぬがれるものと思われる。

引用文出典

Albee, Edward. *All Over*.
 Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*.
 _____. *The Last Tycoon*.
 James, Henry. *Daisy Miller*.
 Miller, Arther. *Death of a Salesman*.
 Segal, Erich. *Love Story*.
 Williams, Tennessee. *The Long Goodbye*.
 _____. *Wagons Full of Cotton*.

参 考 文 献

- Geis, M. L. and A. M. Zwicky. (1971) "On Invited Inference", *Linguistic Inquiry* 2 : 4.
- Goodman, N. (1952) "The Problems of Counterfactual Conditionals", in L. Linsky (ed.)
Semantics and the Philosophy of Language, University of Illinois Press.
- Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation", in Cole and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics, Speech Acts*, Vol. 3, Academic Press.
- Karttunen, L. (1971) "Counterfactual Conditionals", *Linguistic Inquiry* 2 : 4.
- Karttunen, L. and S. Peters (1979) "Conventional Implicature", in *Syntax and Semantics, Presupposition*, Vol. 11, Academic Press.
- 毛利可信 (1980) 「英語の語用論」大修館書店
- Sadock, J. M. (1978) "On Testing for Conversational Implicature", in *Syntax and Semantics, Pragmatics*, Vol. 9, Academic Press.
- Wunderlich, D. (1977) "Assertion, Conditional Speech Acts, and Practical Inferences", *Journal of Pragmatics* 1 : 1.
- Yamanashi, M. (山梨正明) (1975) "Where Do Conditional Expressions Qualify ?. Functional Variability between Logical and Ordinary Language Conditionals," Fasold-Shuy (eds.) *Analyzing Variation in Language. Papers from the Second Colloquium on New Ways of Analyzing Variation*, Georgetown University Press.